

浦島太郎

動画リンク：

浦島太郎

今回は日本の昔ばなし「浦島太郎」を学びながら日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部・2部・3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部→2部→3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

はじめに。お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための昔ばなしや童話のことです。「おとぎ話」の中には語り継がれてきた「昔ばなし」も、そして創作である「童話」も含まれます。

「浦島太郎」はとても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「浦島太郎」のお話を始めます。

むかし、むかし、丹後の国水の江の浦に、浦島太郎というりょうしがありました。

浦島太郎は、毎日つりざおをかついでは海へ出かけて、**たいや**、**かつお**などのおさかなをつって、おとうさんおかあさんをやしなっていました。

ある日、浦島はいつものとおり海へ出て、一日おさかなをつって、帰ってきました。途中、子どもが五、六人往来にあつまって、がやがやいっていました。何なにかとおもって浦島がのぞいてみると、小さいかめの子を一ぴきつかまえて、棒でつついたり、石でたたいたり、さんざんにいじめているのです。浦島は見かねて、

「まあ、そんなかわいそうなことをするものではない。いい子だから」

と、とめました。子どもたちはきき入れようとしなくて、

「なんだい。なんだい、かまうもんかい」

といいながら、またかめの子を、あおむけにひっくりかえして、足でけったり、砂のなかにうずめたりしました。浦島はますますかわいそうにおもって、

「じゃあ、おじさんが**おかね**をあげるから、そのかめの子を売っておくれ」

といいますと、こどもたちは、

「うんうん、**おかね**をくれるならやってもいい」

といって、手を出しました。そこで浦島は**おかね**をやってかめの子をもらいうけました。

子どもたちは、

「おじさん、ありがとう。また買っておくれよ」
と、わいわいしながら、行ってしまいました。

そのあとで浦島は、**こうら**からそっと出したかめの首くびをやさしくなでてやって、
「やれやれ、あぶないところだった。さあもうお帰りお帰り」
といって、わざわざ、かめを海ばたまで持って行ってはなしてやりました。かめはさもうれしように、首や手足をうごかして、やがて、ぶくぶくあわをたてながら、水のなかにふかくしずんで行ってしまいました。

それから二、三日たって、浦島はまた舟にのって海へつりに出かけました。遠い沖おきのほうまでもこぎ出して、一生けんめいおさかなをつっていますと、ふとうしろのほうで

「浦島さん、浦島さん」
とよぶ声がしました。おやおもってふりかえってみますと、だれも人のかげは見えません。その代かわり、いつのまにか、一ぴきのかめが、舟のそばにきていました。

浦島がふしぎそうな顔をしていると、
「わたくしは、先日助けていただいたかめでございます。きょうはちょっとそのお礼にまいりました」

かめがこうだったので、浦島はびっくりしました。
「まあ、そうかい。わざわざ礼なんぞいいにくるにはおよばないのに」
「でも、ほんとうにありがとうございました。ときに、浦島さん、あなたは**りゅう宮**をごらんになったことがありますか」
「いや、話にはきいているが、まだ見たことはないよ」
「ではほんのお礼のしるしに、わたくしが**りゅう**を見せて上げたいとおもいますがいかがでしょう」

「へえ、それはおもしろいね。ぜひ行ってみたいが、それはなんでも海の底にあるということではないか。どうして行くつもりだね。わたしにはとてもそこまでおよいでは行けないよ」

「なに、わけはございません。わたくしの背中におのりください」
かめはこういって、背中を出しました。浦島は半分きみわるくおもいながら、いわれるままに、かめの背中にのりました。

かめはすぐに白い波を切って、ずんずんおよいで行きました。ざあざあいう波の音がだんだん遠くなって、青い青い水の底へ、ただもう夢のようにこぼれて行きますと、ふと、そこらがかつとあかるくなって、白玉のようにきれいな砂の道がつづいて、むこうにりっぱな門が見えました。その奥にきらきら光って、目のくらむような金銀のかわらが、たかくそびえていました。

「さあ、**りゅう宮**へまいりました」
かめはこういって、浦島を背中からおろして、
「しばらくお待ちください」
といったまま、門のなかへは行って行きました。

まもなく、かめはまた出てきて、
「さあ、こちらへ」

と、浦島を御殿ごてんのなかへ案内しました。**たいや、ひらめやかれい**や、いろいろのおさかなが、ものめずらしそうな目で見ているなかをとおって、は行って行きますと、乙姫さまがおおぜいの腰元をつれて、お迎えに出てきました。やがて乙姫さまについて、浦島はずんずん奥おくへとおって行きました。**めのう**の天井に**さんご**の柱、廊下には**るり**がしきつめてありました。こわごわその上をあるいて行きますと、どこからともなくいいにおいがして、たのしい楽の音がきこえてきました。

やがて、水晶の壁に、いろいろの宝石をちりばめた大広間にとおりますと、

「浦島さん、ようこそおいでくださいました。先日はかめのいのちをお助けくださいまして、まことにありがとうございます。なんにもおもてなしはございませんが、どうぞゆっくりおあそびくださいまし」

と、乙姫さまは行って、ていねいにおじぎしました。やがて、**たい**をかしらに、**かつお**だの、**ふぐ**だの、**えび**だの、**たこ**だの、大小いろいろのおさかなが、めずらしいごちそうを山とはこんできて、にぎやかな酒盛がはじまりました。きれいな腰元たちは、歌をうたったり踊りをおどったりしました。浦島はただもう夢のなかで夢を見ているようでした。

ごちそうがすむと、浦島はまた乙姫さまの案内で、御殿のなかをのこらず見せてもらいました。どのおへやも、どのおへやも、めずらしい宝石でかざり立ててありますからそのうつくしさは、とても口やことばではいえないくらいでした。ひととおり見てしまうと、乙姫さまは、

「こんどは四季のけしきをお目にかけましょう」

と、まず、東の戸をおあけになりました。そこは春のけしきで、いちめん、ぼうっとかすんだなかに、さくらの花が、うつくしい絵のように咲き乱れていました。青青としたやなぎの枝が風になびいて、そのなかで小鳥がないたり、ちょうちょうが舞ったりしていました。

次に、南の戸をおあけになりました。そこは夏のけしきで、垣根には白いうの花が咲いて、お庭の木の青葉のなかでは、せみや**ひぐらし**がなくていました。お池には赤と白のはすの花が咲いて、その葉の上には、水晶の珠のように露がたまっていました。お池のふちには、きれいなさざ波が立って、**おしどり**や**かも**がうかんでいました。

次に西の戸をおあけになりました。そこは秋のけしきで花壇のなかには、黄ぎく、白しらぎくが咲き乱れて、ぷんといいかおりを立てました。むこうを見ると、かっともえ立つようなもみじの林の奥に、白い霧がたちこめていて、しかのなく声がかなくきこえました。

いちばんおしまい、北の戸をおあけになりました。そこは冬のけしきで、野には散りのこった枯葉の上に、霜がきらきら光っていました。山から谷にかけて、雪がまっ白に降り埋ずんだなかから、柴をたくけむりがほそぼそとあがっていました。

浦島は何を見ても、おどろきあきれて、目ばかり見はっていました。そのうちだんだんぼうっとしてきて、お酒に酔った人ようになって、何もかもわすれてしまいました。

毎日おもしろい、めずらしいことが、それからそれとつづいて、あまり**りゅう**宮がたのしいので、なんということもおもわずに、うかうかあそんでくらすうち、三年の月日がたちました。

三年めの春になったとき、浦島はときどき、ひさしくわすれていたふるさとの夢を見るようになりました。春の日のぼかぼかあたっている水の江の浜べで、りょうしたちがげんきよく舟うたをうたいながら、網をひいたり舟をこいだりしているところを、まざまざと夢に見るようになりました。浦島はいまさらのように、

「おとうさんや、おかあさんは、いまごろどうしておいでになるだろう」

と、こうおもい出すと、もう、いても立ってもいられなくなるような気がしました。なんでも早くうちへ帰りたいとばかりおもうようになりました。ですから、もうこのごろでは、歌をきいても、踊りを見ても、おもしろくない顔をして、ふさぎこんでばかりいました。

その様子ようすを見ると、乙姫さまは心配しんぱいして、

「浦島さん、ご気分でもおわるいのですか」

とおききになりました。浦島はもじもじしながら、

「いいえ、そうではありません。じつはうちへ帰りたくなったものですから」

といいますと、乙姫さまはきゅうに、たいそうがっかりした様子をなさいました。

「まあ、それはざんねんでございますこと。でもあなたのお顔をはいけんいたしますと、この上おひきとめ申しても、むだのようにおもわれます。ではいたし方かたございません、行っていらっしやいまし」

こうかなしそうにあって、乙姫さまは、奥からきれいな宝石でかざった箱を持っておいでになって、

「これは玉手箱といって、なかには、人間のいちばんだいじなたからがこめてございます。これをおわかれのしるしにさし上げますから、お持ちかえりくださいまし。ですが、あなたがもういちどりゅう宮へ帰ってきたいとおぼしめすなら、どんなことがあっても、けっしてこの箱をあけてごらんになってはいけません」

と、くれぐれもねんをおして、玉手箱をおわたしになりました。浦島は、

「ええ、ええ、けっしてあけません」

といって、玉手箱をこわきにかかえたまま、りゅう宮の門を出ますと、乙姫おとひめさまは、またおおぜいの腰元をつれて、門のそとまでお見送りになりました。

もうそこには、れいのかめがきて待っていました。

浦島はうれしいのとかなしいのとで、胸がいっぱいになっていました。そしてかめの背中にのりますと、かめはすぐ波を切って上がって行って、まもなくもとの浜べにつきました。

「では浦島さん、ごきげんよろしゅう」

と、かめは行って、また水のなかにもぐって行きました。浦島はしばらく、かめの行くえを見送っていました。

浦島は海ばたに立ったまま、しばらくそこらを見まわしました。春の日がぼかぼかあたって、いちめんにかすんだ海の上に、どこからともなく、にぎやかな舟うたがきこえました。それは夢のなかで見たふるさとの浜べの景色とちっともちがったところはありませんでした。けれどよく見ると、そこらの様子がなんとなくかわっていて、あう人もあう人も、いっこうに見知らない顔ばかりで、むこうでもみょうな顔をして、じろじろ見ながら、ことばもかけずにすまして行ってしまいます。

「おかしなこともあるものだ。たった三年のあいだに、みんなどこかへ行ってしまうはずはない。まあ、なんでも早くうちへ行ってみよう」

こうひとりごとをいいながら、浦島はじぶんの家の方角ほうがくへあるき出しました。ところが、そことおもうあたりには草やあしがぼうぼうとしげって、家なぞはかげもかたちもありません。むかし家の立っていたらしいあとさえものこってはいませんでした。いったい、おとうさんやおかあさんはどうなったのでしょうか。浦島は、

「ふしぎだ。ふしぎだ」

とくり返しながら、きつねにつままれたような、きょとんとした顔をしていました。

するとそこへ、よぼよぼのおばあさんがひとり、つえにすがってやってきました。浦島はさっそく、

「もしもし、おばあさん、浦島太郎のうちはどこでしょう」

と、声をかけますと、おばあさんはげんそうに、しょぼしょぼした目で、浦島の顔をながめながら、

「へえ、浦島太郎。そんな人はきいたことがありませんよ」

といました。浦島はやっきとなって、

「そんなはずはありません。たしかにこのへんに住んでいたのです」

といました。

そういわれて、おばあさんは、

「はてね」と、首をかしげながら、つえでせいのびしてしばらくかंगाえこんでいたが、やがてほんとひざをたたいて、

「ああ、そうそう、浦島太郎さんというと、あれはもう三百年も前の人ですよ。なんでも、わたしが子どものじぶんきいた話に、むかし、むかし、この水の江の浜に、浦島太郎という人があって、ある日、舟にのってつりに出たまま、帰ってこなくなりました。たぶんりゅう宮へでも行ったのだらうということです。なにしろ大昔の話だからね」

こう行って、また腰をかがめて、よぼよぼあるいて行ってしまいました。

浦島はびっくりしてしまいました。

「はて、三百年、おかしなこともあるものだ。たった三年りゅう宮にいたつもりなのに、それが三百年とは。するとりゅう宮の三年は、人間の三百年にあたるのかしらん。それでは家もなくなるはずだし、おとうさんやおかあさんがいらっしやらないのもふしぎはない」

こうおもうと、浦島はきゅうにかなしくなって、さびしくなって、目の前がぐらぐらになりました。いまさらりゅう宮がこいしくてたまらなくなりました。

しおしおとまた浜べへ出てみましたが、海の水はまんまんとたたえていて、どこがはてともしれません。もうかめも出てきませんから、どうしてりゅう宮へわたろう手だてもありませんでした。

そのとき、浦島はふと、かかえていた玉手箱に気がつきました。

「そうだ。この箱をあけてみたら、わかるかもしれない」

こうおもうとうれしくなって、浦島は、うっかり乙姫さまにいわれたことはわすれて、箱のふたをとりました。するとむらさき色の雲が、なかからむくむく立ちのぼって、それが顔にかかったかとおもうと、すうっと消えて行って箱のなかにはなんにもものこっていませんでした。その代わり、いつのまにか顔じゅうしわになって、手も足もちぢかまって、きれいなみぎわの水にうつった影を見ると、髪もひげも、まっしろな、かわいいおじいさんになっていました。

浦島はからになった箱のなかをのぞいて、

「なるほど、乙姫さまが、人間のいちばんだいじなたからを入れておくとおっしゃったあれは、人間の寿命だったのだな」

と、ざんねんそうにつぶやきました。

春の海はどこまでも遠くかすんでいました。どこからかいい声で舟うたをうたうのが、またきこえてきました。

浦島は、ぼんやりとむかしのことをおもい出していました。

日本昔ばなし「浦島太郎」は、いかがでしたか？ あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。 それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

